HIGHLANDERS No.4

人の生老病死と高所環境－「高地文明における医学生理・生態・文化的適応」

高所プロジェクト・ニュースレター第 4 号（2009 年 8 月 25 日発行）

文化班　白館戒雲（ツルティム・ケサン）

チベット大乗仏教における論理学・認識論 － ダルマキールティの『量評釈』とタルマリンチェンの註釈書

インド大乗仏教のディグナーガ（陳那、480-540 年頃）は主著『集量論』において、仏陀こそがその智恵と慈悲の実践を通じて解脱の希求者にとって「量」（基準）であり、有益なものと有害なものの弁別を教え、人士の利益を達成させる教師であること、聖典の権威性も結局は現量(直接知覚)と比量(推理)に他ならないことを示し、因明学（論理学、認識論）を確立した。ダルマキールティ（法称、600-660 年頃）はその評釈として『量評釈』を著し、それを大成した。これにはインドでも幾つもの註釈と復註が著され、中観・唯識の哲学の基礎になり、インドの諸学派にも多大な影響を与えた。近代ヨーロッパの学者は、形而上学を否定し、道徳や文化の根拠を明らかにしたドイツの大哲学者に喩えて、彼のことを「インドのカント」と呼んだ。

因明学はチベットにも伝えられ、13 世紀初めにインド仏教の滅亡を逃れてシャーキャシュリーバドラたちが来て以降、『量評釈』を中心として因明は顕教の主要教科の一つになった。因明学は世俗の学問にすぎないといった評価もあったが、ツォンカパ・ロサンタクパ（1357-1419）はそれを一変させた。彼によれば、無常、空性といった凡夫にとって不明瞭な事物の真相は、言語や概念を用いてこそ理解される。彼の自伝詩（東北大学蔵外文献目録番号 No.5275［58］）には、因明学への否定的評価にもかかわらず、彼がそこに仏道の本質的内容を見出し、喜んだことが示されている。弟子による彼の伝記『信仰の渡し場』（Toh.No.5259）にも、彼が『量評釈』の注釈書を見て証悟したこと、特に第 2 章の道の規定により、ダルマキールティの教義と論理へ無限の強い信仰を生じ、『量評釈』の本文を見ただけでいつも身の毛がよだち、涙が途絶えなかったと伝えている。

ツォンカパ自身は因明学は講義が中心であったので、本格的註釈は弟子たちが著作した。中で重要なのが、彼の法嗣ギャルツァプ・タルマリンチェン（rGyal tshab Dar ma rin chen, 1364-1432）の著『量評釈の釈論・解脱道作明』（同番号 No.5450 Cha）であり、ラサ版で 432 枚の大著である。ゲルク派ではこれは因明学の集大成と考えられて、大いに修学され、多くの註釈が著された。冬の 1 ヶ月半はラサ南西の寺院“Jang phu dgon pa”に各大寺の学僧が集まって「ジャンの冬の法会」を行い、それを集中的に研鑽する習慣もあった。

チベットでは 20 世紀半ばの動乱と中国政府による仏教禁圧政策もあって伝統が途絶えたし、インドでも最高水準の学道を伝える人は乏しくなった。筆者は亡命直後に最高峰の学者たちに指導を受けたが、来日後も近現代の研究成果を学びつつ、伝統を伝えることに努力してきた。ここ数年、それに関する著書『インド論理学・認識論の発展と論理学・認識論の歴史』や幾つもの論文を発表し、『解脱道作明』の和訳も開始した。本年度は当研究所にて、同第 2 章の研究が許可されたので、その全体の和訳研究を完成し、序論、索引をつけて発表する予定である。

第 2 章「量の成立」は、ディグナーガ著『集量論』の帰敬偈に示された「量となった者」「衆生を利益したいと欲する者」「教主」「善逝」「救護者」の五つの呼称を解説し、仏世尊こそが解脱の希求者にとって量(権威、認識基準)であると、論証するものである。まず、仏世尊の存在は、思惟と行動という因の円満二つと、自利と利他という果の円満二つから捉えられる 思惟は、衆生を利益したいと欲する大悲、行動は、無我を証得する智恵を他者のために修習する教主である。自利は、障礙の断除と智・悲の証得を本体とする善逝の特性を具えたこと、利他は、自己が見た道を他者に教えて救護することである。残り四つの呼称についても順と逆の次第を通じて、彼こそが「量となった者」であることが、確立される。解脱は、苦行や儀式などによってではなく、苦集滅道という四聖諦の理解と我執の否定こそにより実現できること、世間は何か超越的な存在の造ったものでなく、我々の精神活動とそれに基づいた行動により造られること、よって現世だけでなく過去生と未来生が存在し、慈悲や利他の実践が本質的であるし、智恵や慈悲など精神的なものは身体的なものと異なって訓練を通じて無限に成長しうることを、説いている。チベット仏教圏の教養ある僧侶たちは、この典籍に基づいて、因果や解脱、一切智などの事柄は決して盲信されるべき事柄ではなく、合理的探求によるべきこと、生老病死など人の生にあって慈悲や智恵がいかに重要であるかということを、学んできたし、教えてきた。現代の文明に生活する者にとっても、その含意はきわめて大きい。

医学班　石本恭子

Dirang Community Health Center の活動

アルナーチャル・プラデーシュ州のディランに約 2 ヵ月間滞在し、ディランコミュニティヘルスセンター（Community Health Center：以下 CHC）で、医療スタッフとともに活動を行った。ディランの保健衛生の中心的役割を果たす CHC を紹介する。

CHC は 1962 年に設立されているが、1944 年にヘルスユニットが West Kameng 県で 2 番目に設置されており（Gazetteer より）、比較的歴史は長いのではないかと思われる。CHC は、ディランの町から歩いて 5 分ほどの町の中心に位置している。医師 2 名、歯科医 1 名、看護師 11 名、薬剤師 1 名、検査技師 1 名、放射線技師 1 名、他助手、事務などを含め 33 名の医療スタッフが勤務している。医師の診察室、入院患者用のベッド 13 床、分娩室、処置室、隔離病棟、検査室、レントゲン室などの設備がある。診察時間外の救急患者の対応もある。医師が不在の場合は、薬剤師が一般診療を行う。

夏の時期（6 月から 8 月）は、特に患者の数が多い時期である。腹痛・下痢・嘔吐などの消化器症状、発熱・咳・疼痛などの感冒症状、マラリア、チフスなどの患者が毎日多く訪れていた。CHC 周辺の住民のみならず、車で 1 時間、2 時間離れた遠くの村から来る患者も多くいる。

CHC を訪れた患者は、医師の診察を受け、処方箋をもらい院内にある薬局に行く。院内にある薬は無料であるが、なければ近くの薬局で購入する。注射・点滴が処方された場合は、注射器などの物品も購入し、看護師の詰所にもっていく。看護師は処方箋を確認し、指示どおりに処置を行う。また、道路工事中の事故、交通事故による外傷患者も多く、ぱっくり傷が開いている場合も少なくない。看護師は、傷口を洗浄・消毒し見事な手さばきで縫合をする。火傷の処置も行っていた。電線工事中に感電し、左手、体側に大火傷をした中年男性がいたが、毎日通院し 10 日間ほどきれいな皮膚に治りつつあった。

母子保健で重要な役割を果たしているのが、Integrated Child Development Section :ICDS である。このセクションには看護師 3~4 名がいて、妊産婦健診、子どもの予防接種、ファミリープランニングを行っている（写真 1、2）。毎週金曜日は、妊婦健診日となっている。一般健診と同時進行しなければならず非常に忙しくなる。妊娠時の採血検査、血圧、体重、子宮底を記録した記録用紙を配布し、毎月の健診を勧めている。出産後は、子どもの予防接種用紙を配布し、予防接種の種類、時期が一目でわかるようになっている。ファミリープランニングとして、避妊用具の挿入、ピルの配布をしている。

CHC は、公の機関であり政府の資金で運営されている。一部患者負担なところはあるが、診察料、入院費（1 日 2 回の食事込み）、予防接種費用など無料である。決して大きな病院ではなく設備も限られているので、ここで対処できない場合はより大きな病院がある街へ搬送されることもしばしばである。

医療スタッフたちは、CHC にある設備、物品、患者がもってくる薬品などを最大限に使い切っており、無駄がない。無駄にできないという現状があるのだが、医師、看護師たちは限られた状況の中で熱心に働いている。そして今日も CHC のスタッフたちは、多くの患者の健康を支えている。

滞在期間中に多くの患者に出会い貴重な体験をした。この場を借りて CHC のスタッフ、町のみなさんに感謝したい。

写真 1　妊婦健診・予防接種の看板（石本撮 ）。

写真 2　予防接種を待つ母親と子ども（石本撮 ）。

生態班　野瀬光弘
ドムカル村での樹木調査

2009 年 7 月 29 日から 8 月 12 日にかけて、高所プロジェクトのフィールドの一つとなっているインドのラダック地方のドムカル村へ樹木調査に行ってきました。本村は、川の上流から下流にかけてゴンマ（Gongma）、バルマ（Barma）、ド（Do）の大きく 3 つに分かれており、さらに細かい集落があります。聞き取りによると、3 つとも村長（Goba）と呼ばれている人がおり、何らかの権限を持っているだろうと推察されます。インドでは、地方行政の実務をパンチャーヤト（Panchayat）と呼ばれる組織が担っています。大きい方から順にディストリクト（District）、ブロック（Block）、ビレッジ（Village）の三層に分かれ、選挙で各議員が選出されます。この制度は必ずしも全土で展開されておらず、権限が州政府から十分に委譲されていないといった問題点が指摘されています。今回の調査では、3 村長とパンチャーヤトとの関係はわかりませんでした。

日本国内では標高 3,000 メートルを超えるとハイマツ以外の木本植物を見ることはほとんどありませんが、ドムカル村では約 4,000 メートル地点まで見られます。最大の違いは自然植生ではなく、人が 1 本ずつ植えたことです。写真のように、川沿いには農地や植林地があって緑色なのに、周囲の山は岩と砂の色しか見られません。調査では、森林所有者からの許可を得て立木に番号を割り振り、それぞれ基準点からの位置、胸高直径、樹高、樹冠のサイズなどを計 11 プロットで計測しました。残念ながら、学名との照合はまだ終わっていませんが、現地では 11 種類の木本植物がありました。

写真 1　ドムカル・ゴンマから上流の方を望む（2009 年 8 月。野瀬撮影）。

写真 2　Coppice の伐採された Dok chang（2009 年 8 月。野瀬撮影 。

ゴンマでは、現地名で Dok chang と呼ばれるヤナギの一種が優占していました。聞き取りによると、春に Coppice（柴）を伐採し、樹皮をとってから 10 本まとめて乾燥させるとのことです（写真 2）。日本でも頭木作業と呼ばれ、ヤナギの木を約 2 メートルの高さで伐採し、防風・防砂の効果を高めることがあるようです。施業としては京都・北山の台スギも似たような手法で、かつては台のような幹から数本の立木を伸ばし、丸太材を生産していました。立てかけられていた 50 本の Coppice の元口、末口、長さを計測したところ、それぞれ平均 4.2cm、1.8cm、3.25m で、かなり細長いことがわかります。用途は建築資材（写真 3）、薪、挿し木（伐採後すぐに 3 本まとめて植栽）などで、自家用以外は販売しています。

標高による樹種の変化や土地の履歴など、調査すべき項目は数多く残されています。

写真 3　屋根の資材に使われている Dok chang の Coppice（2009 年 8 月。野瀬撮影 ）。

統括班　野瀬光弘

インドミニ情報(2)

インドは、信頼性はともかく詳細な情報が時々ネットで公開されています。今回は Census of India（http://censusindia.gov.in/）のホームページで見つけたジャンムー・カシュミール州ラダック（レー）ディストリクトの基本データを紹介します。

データには、男女別、都市農村別、年齢別の人口、宗教、教育レベルなどがあります。人口は州全体で約 1,000 万人なのに対して、ラダックはわずか 11 万 7,232 人に過ぎません。性比は 823 で女性の方が約 1 万人少ないという偏りがあります。大きな特徴は Scheduled Tribe（指定部族）と呼ばれる少数民族が 9 万 6,174 人もいて、ディストリクト人口の 82.0%を占めていることです。同州でもたとえばジャンムーディストリクトは 5 万 3,304 人、3.4%しかいないところをみると、いかに多いかがわかります。写真のように、ちょっと肌の色が違うだけで外見は日本人とそれほど変わらない女性を見かけることもありました。こうした指定部族に対しては優遇政策が講じられており、大学や政府職員の一定比率を占めるよう定められています。

写真　農作業をしていたドムカル・バルマの女性（2009 年 8 月。野瀬撮影）。

識字率は全体で 65%（男性 75%、女性 53%）とインド内では平均的な数字です。教育レベルは初等教育のプライマリーまでが約 3 万人を占め、前期中等教育と高等教育を合計すると約 3.3 万人で、大学以上への進学は 5%にとどまっています。印象としては、全体的に教育に力を入れていることもあり、若年層ほど識字率は高く、英語を話せる人が多いと感じます。ドムカルで実施した樹木調査のガイドをしてくれた 20 歳代の男性は 2 人とも大学生で、きれいな発音で英語を話していました。ただし、うち 1 人は兄弟 10 人のうち 3 人が十分な教育を受けていないと言っていました。

宗教別の人口は他地域と異なる状況にあります。インド全体では、ヒンドゥー教徒 80.5%、イスラム教徒 13.4%、キリスト教徒 2.3%の順番で、仏教徒は 0.8%しかいませんが、ラダックでは 90,618 人と最大勢力です。2009 年 8 月 8 日にダライラマ 14 世がレーにやってきたときの様子がテレビのニュースで流れて、大勢の住民が正装して出迎えていました。書店には著作が並んでいましたし、家には写真が飾られるなど人々から尊崇されている様子がうかがえました。

主な海外出張

- 奥宮清人
  青海省（8 月 11 日～9 月 3 日）
- 松林公蔵
  青海省（8 月 12 日～8 月 23 日）
- 石川元直
  青海省（8 月 12 日～9 月 3 日）
- 石本恭子
  青海省（8 月 12 日～9 月 3 日）
- 山口哲由
  青海省（8 月 13 日～9 月 3 日）
- 斎藤清明
  タイ・ブータン（8 月 20 日～30 日）
- 月原敏博
  ラダック（8 月 21 日～9 月 12 日）

編集・発行：総合地球環境学研究所・高所プロジェクト
住所　：〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4
URL　：http://www.chikyu.ac.jp/high-altitude